

ツアーはあなたと

目次

ツアーはあなたと	5
おいしいツアー	139

ツアーはあなたと

序

ドクン。

あ。また鳴った。

どうしよう……

美里はさつきからうるさく鳴り続ける鼓動をどうにかしようと、胸に手を当てた。そんなことしたって、このドキドキが止まるわけじゃないのに。

もう、どうしよう……。私の番まだ先なのに……

高鳴る胸に手を当てたまま、美里は何度も深呼吸を繰り返す。

ああ、嫌だ。胸が苦しい……

ふと、周りが気になってキョロキョロと見回してみる。

ヴィレツジ観光の採用試験、最終面接の会場だ。本社の会議室が控え室として使われ、何人もの学生が緊張した面持ちで自分の名を呼ばれるのを待っている。

男も女も紺や黒、グレーのスーツに身を包んでいた。たまに違う服を着ている者もいるが、それは制服姿の高校生だ。

ああ、もうっ。なんでみんな平気そうな顔をしているの？

美里はとにかく落ち着こうと、ゆっくりと深呼吸をした。

長い髪は一つに縛っているし、もちろん色だって、少し染めていたのを黒に直した。

就活用のスーツだってきちんとアイロンをかけてきた。さつき何度も鏡の前で確認したけど、皺しわ一つない。

自分で言うのもなんだけれど凛りんとしていて、仕事もできそうに見える。絶対にいける。

そう言い聞かせているのに、どうしても落ち着かない。溜息が出てしまう。

たぶん表情だって曇っているに違いない。

「十八番。埼玉大学。古河ふるかみちるさんどうぞ」

ドアが開き、係員がまた次の人の名前を呼ぶ。

「やだ。やばい。どうしよう。あがっちゃう。私、次の次だ……」

美里の隣で女子高校生が不安げに胸に手を当て、呟つぶやいていた。思わず横目で見てしまい、その子と目が合う。

「あっ……。ごめんなさい。うるさかったですか？」

今時珍しいセーラー服に三つ編みの少女が、ペロりと舌を出す。

あがっちゃうと言いながら、お茶目に舌を出す少女に、美里は少し驚いた。意外と余裕があるみたいで羨うらやましい。

「ううん。大丈夫よ」

なんとか微笑を作って答えると、少女に眩しそうに見つめられた。

「お姉さん、かっこいいですよね。なんかこうデキる女って感じ。それに全然あがっていなさそう」
そう見えるのは、緊張しすぎて、表情が動かないからだ。

「そんなことない。これでもすごくあがってるの。あなたの方が落ち着いて見えるけど?」

「私なんか動悸も激しいし、嫌な汗も出ているのよ。思わずそう言ってしまったくなる。」

「まさかー」

少女は信じられないみたいで、けたけたと笑った。他の受験者の視線が自分たちに突き刺さる。

「あー。すみません。私ちょっと、トイレにでも行って緊張をほぐしてきます」

周囲から無言で睨まれた少女は小さく首をすくめると、さっと立ち上がり会議室を出ていった。
今からトイレに行つて間に合うのかしら。

ちよつと心配になる。

今までの平均面接時間は一人おおよそ十分だった。だったら間に合うわねと、納得してふと胸に付けた自分の名札を見た。

二十七番。松橋美里。

今の子が次の次……。私の番は……

自分の番号を確認し、呼ばれるまではかなりあるわと、美里は深く息を吐き出した。

待ち時間が長いほど、緊張が高まっていく。このままでは緊張しすぎて、本番で大失敗をやらかすかもしれない。不安に胸が押し潰されそうになって、美里はぎゅつと手を握り締めた。けれど鼓

動は速くなるばかりで、息苦しささえ覚えてしまう。

私もさっきの子のようはどこかで緊張をほぐさないと……

もう、いったいいつからこんなにあがるようになってしまったんだろう……

少なくとも大学に入るまでは平気だったはずだと、また溜息を漏らす。

多分あれがきっかけだ。

地元の成人式で新成人代表に選ばれ、壇上で挨拶をした時のことだ。

黒地に朱色の鳳凰が描かれた、華やかな振袖姿で舞台上に立った時は注目を浴びてとても気持ちよかつた。なのにその後がいけなかつた。

挨拶を終え、マイクから離れようとした時、晴れ着の長い袖がマイクに引っかかってしまったのだ。舞台上のマイクにどうして袖が引っかかるのか、いまだにわからないけれど、マイクは床に落ち、会場に大きな音が響いた。ついでにそのマイクにつまづき、美里も危うくころびそうになった。

会場のどよめきと失笑が今でも耳に残っている。最悪なのはその後、当時付き合っていた彼からも、ドジだなと笑われたことだ。

たったそれだけで、と人は言うかもしれないけれど、それ以来人前に出ると、どうしようもなく緊張するようになってしまった。

緊張して頭が真っ白になる。そして全身が震え出してしまう。

緊張しちゃ駄目だと思えば思うほど緊張が増し、しゃべれなくなってしまう。さらに顔が強張り、目つきもきつくなるせいで、悪印象しか与えなくなってしまうのだ。

大学の成績は悪くないし、採用試験の書類審査はいつも難なく通る。

だが、どんなに順調に進んでも、面接官を前にしたとたん、あがってボロボロになるのだ。今だって胸が激しく鳴っている。

息が苦しい。

ああ、どうしよう。

美里はちらちらとドアと腕時計とを見比べ始めた。

このままではまた面接で落ちてしまう。

それはもう嫌だ……

ヴィレツジ観光はこの不況をものともせず、観光業界で着実に業績を伸ばしている優良企業だ。

落ちるわけにはいかない。いや、なんと少しでも受かりたい。会社の業績がいいからというより

も、この会社の企画するツアーが大好きだから。

友達に誘われて参加した、このヴィレツジ観光の都内老舗甘味屋ツアーがとてもよかった。

どうやって調べているのか、本当に美味しいお店ばかりで、参加してとても幸せな気分になれたのだ。

成人式で大失敗をして彼と別れた直後だったからかもしれないけれど、美味しい甘味が心にしみるようで、ささくれだった気持ちが癒された。

甘い物で幸せになれるなんてお手軽だと笑われるかもしれないけれど……

その時のツアーコンダクターから、他にもB級グルメツアーや、アキバメイドカフェツアー、ア

ニメの聖地ツアーまであると聞かされ、びつくりした。

気になって後から調べたら、そういう一風変わった企画が受けて業績を伸ばしている会社だった。そんな企画を考えるのはおもしろそうだし、そういう旅を仕事でできたらもとおもしろいだろうと思ったのだ。

だからなんとしても、この会社に入りたい。

そのためには……

さっきの女子高校生ではないけれど、とにかくリラックスしないと。

美里は思い切って立ち上がり、廊下へ出た。

とりあえず外の空気でも吸おうと、非常階段へ出る。

高層というほど高いビルではなかったけれど、頬をなぶる風に目が覚める思いだ。

非常階段の手すりに両手をかけ、美里は思いっきり深呼吸をした。手すりには『禁煙』と書かれたステッカーが貼られている。

ひよっとしたら誰かがよく煙草を吸いにくるのかしらと、周囲を見回した。

よし、誰もいない。

目の届く範囲に人の影はない。それならついでに面接の予行演習もしてしまえと、美里はもう一度深呼吸をし、声を出した。

「二十七番。松橋美里です。ええっと……」

言葉が続かない。趣味とか志望動機とかを言わなければいけないのに、頭が真っ白になってしま

い口から出てこないのだ。

それでもなんとか頭の中で質問されそうな項目をイメージして、口を開いてみる。

「ぞ、残業は厭いといませぬ……。あー。うーん。ツアーコンダクターを希望しています。それから……。女子寮に入寮を希望します。と……。あー駄目だ……」

面接を想定して声を出すだけでも、足が震えてくる。

思わずそのまましゃがみこみ、あがらないようにするおまじないがあったはずと、掌てのひらを開いた。「人……。そう、人よ。人って書いて呑み込めば、絶対にあがらない」

ぶつぶつと言つて、掌に『人』と書き、呑み込む。しかも、面接の予行演習をしていたせいで、無意識のうちに、「ひと……。ひと……。ひと……」と声に出していた。

とたん、頭の上から笑い声が降ってきた。しかも大爆笑。

「ひいー、腹いてえ。それガチでやってんの？ 手に人……」

「えっ!？」

誰もいないと思っていたのに、見られていた？

いままでの予行演習を聞かれていただけでも恥ずかしいのに。

しかも笑われたのだ。美里は焦つて笑い声の出所を捜した。焦りすぎて冷汗まで出てくる。

その時ふと、煙草の匂いが漂ってきた。匂いにつられてその方向を見ると、上階から二十代後半ぐらいの男が一人、啞くえ煙草で下りてくるところだった。

どうやら美里の頭の真上にあたる上階の踊り場にいたらしい。

もし下の踊り場で煙草を吸われていたら、匂いで気付いたかもしれない。でも、煙は高いところに昇る。その上、風が吹いていたので全く気付かなかったのだ。

美里のすぐそばに立った男の首にはIDカードがぶら下がっていた。風にあおられたせいか、裏返つていて名前や部署まではわからない。しかし裏に書かれている会社のロゴマークの色から、彼が相当のエリートであるとわかった。

平社員は青いロゴだが、役職が上がるにつれて、ブラック、そしてゴールドに変わると会社訪問時に説明を受けている。

ゴールド？ じゃあ部長以上？

男のロゴの色に美里は目を瞠みはった。

男のスーツは皺しわになつていて、ともするとだらしなく見える。けれども、腹立はらたいしいほどいい男で、そのラフさ加減さえも彼の魅力になつていてときめいてしまう。

洗練された雰囲気にくわえ、理知的で端整な面立ちだ。それなのにどこかふてぶてしい部分もあって美里は男から目が離せなかった。

肌の色はやや日焼けして黒かったが、すつと伸びた鼻筋に、切れ長の涼しげな目。少し鋭角な眉。唇は下唇が厚く上唇とのバランスが少し悪いようにも思えるが、そのアンバランスさがかえってセクシーだ。

両目の大きさも二重の幅も綺麗に整っている。右の目尻の小さなほくろが男のセクシーさをさらに際立たせていた。

足も長く、下手な雑誌のスーツモデルより、いいスタイルだ。

そんな男が煙草を啜くえたまま美里を見て笑っていた。

「あー、笑った。何？ 面接のイメージトレーニング？」

携帯灰皿をスートのポケットから取り出し、男は煙草を消す。

男の台詞を聞いたとたん、ドキドキしていた気持ちが吹っ飛んだ。

「そうよ。私、今この人に笑われたのよ……」

「き、聞こえたの？」

恥ずかしさに震えながらも美里は聞き返す。

「うん。それと……」

と、男は掌てのひらに『人』と書いて呑み込む真似をした。

「あ、これ、さっきも言ったっけ？ 人書いて呑み込むの。マジでやってた？ 今時信じらんねー」

「な、ななっ……」

「たかだか面接でそこまでやるほどあがるんだ？ そんなにうちの会社に入りたい？ たいしていい会社じゃないけどなー」

男は切れ長の目を細めて美里を見つめていた。それがものすごく馬鹿にされたように感じられて、美里の羞恥しゆうちは腹立ちはらだちに変わる。

「ただか面接で、と言われたのにもカチンときていた。

「入りたいわ。いい会社だもの。この不況下で、着実に業績を伸ばしているし、何よりこの会社で

企画されるツアーって、マニアックでものすごくニッチでおもしろいじゃない。その一風変わったところが受けて、お客さんを、それもリピーターを掴つかんでいるわけでしょ」

面接で言おうと思っていた志望動機が口をついて出てきている。

一人でイメージトレーニングをしている時には、頭が真っ白になって出てこなかった部分だ。

「私もそんなツアーの企画を立ててみたいし、一緒にお客さんと回って、おもしろかったって言ってもらいたい」

「で？」

男は一步美里に詰め寄り、首を傾げる。

「でって……」

男の気のない返事に、激しい怒りを覚えて沸騰ふつしそうになる。

「必死だな」

その言葉がとどめとなった。

怒りと呼ぶには生易しい感情が身体中に渦巻き、全身がかつと熱くなる。

「必死って……。人のこと何も知らないくせに、失礼だと思わないのっ！ だいたいあなた社員じゃないの？ それも、ゴールドロゴのIDカードじゃない。そんな人が自分の会社を悪く言うなんて、最低っ！」

思わず怒鳴ると、目の前の男の瞳が見開かれた。ややあって、その瞳がずっと細くなり、口角が上がる。

「おもしろいな、お前」

「はい？」

何がおもしろいというのだろう。

馬鹿にされている。完全に馬鹿にされている。

微笑む男を見て、美里はただただ全身を熱くし、唇を噛み締めた。

「どこがおもしろいつて言うのよ？ だいたいあなた、仕事さぼって一服？ しかもここ禁煙なのにつ」

男の手にある携帯灰皿を見ながら、美里は自分が今まで握っていた非常階段の手すりを叩いた。

「ほら、ここ、ここに禁煙って書いてあるじゃないの！」

「今度はそれか？」

男は携帯灰皿をポケットにしまい込むと、手すりを叩く美里の手首を握ってきた。

「えっ？ 何？」

一五センチしかない美里より男は三十センチ近くも高い。遠目で見た時より、肩幅も胸板も厚く、美里は自分の鼓動が少し速くなるのを感じた。

「面接であがらない、いいおまじない教えてやるよ」

にやりと笑うと、男はいきなり美里を抱き寄せ、そのまま唇を重ねてくる。

「ん、んーっ」

あまりにも唐突だったため、抵抗もできず、男の唇と忍び込んだ舌を受け入れてしまう。

煙草の味が口中に広がる。それが不快で、両腕を突っ張って男の身体を離そうとしたが、男の力には敵わず、逆に抱き込まれてしまった。

しかも舌は容赦なく口腔をまさぐり、奥で縮こまっている美里の舌を引き出そうと絡んでくる。

「ふっ、う……んっ」

尖らせた舌先で上顎に近い部分をなぞられ、全身が粟あわた立った。それがわかったのか、男は美里の背中に回している手を少しずつ移動させ、首筋をそつと撫でてきた。

とたん、ただくすぐったかっただけの刺激が、甘いそれへと変わる。煙草のせいで苦かった男の舌の味まで変化して、腰から下に力が入らなくなり、下腹部にじんとした痺しびれが走った。

やだ……。なんで……

見知らぬ男からの強引なキスなのに……。自分の身体の変化に心がついていかない。

まるで自分が男に飢えている淫乱な女になったように思えて、激しい自己嫌悪に襲われる。

駄目。駄目なのに……

膝が折れそうになるのを必死に堪たえる。男に半ば拘束され、自由に動かせない腕にも力を入れた。これ以上彼にキスされていると妙な衝動が突き上げてきそう、首を振って逃れようとする。

それが功を奏したのか、くちゅりと濡れた音を立てて男の唇が離れた。

「どうした？」

男は楽しげに目を細め、真っ赤になった美里を見下ろす。

「俺、キスうまいだろう？」

「……っ」

考えるよりも早く男の頬を引っぱっていた。

「変態っ、最低っ！」

叩いた手がジンジンする。なのに男は口元に笑みを浮かべて叩かれた頬を撫でている。

「俺、最低？ まあ、よく言われるけど……」

「よく言われるって……」

美里は一瞬絶句した。

「わかってるならなんでっ!? だいたい知らない相手にいきなりキスって、もうね、そこからして、最低で変態よっ」

まだ何か言ってやりたい気分だったが、これ以上何を言っても男を喜ばせるだけかもしれない。

美里はパンプスのヒールをカッと鳴らして、男に背を向けた。

「戻るの？ そうか、面接だもんな。まあ、せいぜい頑張りな」

背中から聞こえてきた声を無視して、美里は非常ドアを荒々しく開けて中に戻った。

—

「ヴィレツジ観光 松橋美里」と書かれたネームプレートが妙に気恥ずかしくて、美里はさつきか

ら何度もスーツの裾を引っ張ったり、埃を払ったりしていた。そうやって初めてのツアーコンダクター勤務を迎えるにあたっての緊張を落ち着かせようとしていたのだ。

最終試験のあったあの日、非常階段で妙な男に馬鹿にされ、キスマでされたせいか、美里は不思議と落ち着いて面接を終えられた。

その結果ツアーコンダクターとしての採用が決まったのだ。

最初の二週間は本社へ出勤したけれど、どこをどう捜しても、無体なキスをしかけてきたあの男は見つからなかった。

嫌味を込めて、あなたのおかげで面接に通りました、と言ってやりたかったのに。

入社後三週間目には総合旅程管理主任者の資格取得のために美里は外部の研修に赴いていたし、さらにここ二ヶ月は会社の研修で国内のあちらこちらを飛び回っていた。

そのせいで今ではすっかりあの男に対する怒りも収まっている。正確に言うと怒りを思い出す暇もないくらい忙しかっただけだけれども。

そしてついに、今日初めて単独でツアーコンダクターを務めるのだ。

今日から一人。

そう思うと胸がどきつとする。緊張でこめかみまで痛くなってきた。

面接で失敗しなかったことで自信がついたのか、あがり症はかなり克服できた。それでも……

美里は胸に手を当てる。

研修中は先輩と二人一組でやってきたからなんとかあったが、今日は何から何まで一人でやらな

ければいけないのだ。

ああ、もう……。本当にどうしよう……。ううん、大丈夫。きっと平気。何度もそう自分に言い聞かせるけれど、高鳴る胸の鼓動を鎮めるのは難しい。

またあがったら？ 身体が震えて何もしゃべれなくなったら？

そんな不安を掻き消したくて、ついてもいないスーツの埃を払ったり、スカートをひっぱったりを繰り返してしまうのだ。

妙にはりきって早く来たのもいけなかったかもしれない。

『基地』と呼ばれている観光バスの営業場は、これから自分がツアーコンダクターとして出発するのだとリアルに感じさせる。

ヴィレッジ観光は関東各県に観光バスの基地を一つずつ構えていた。そこでバスの整備をしたり、バスの運用スケジュールを立てたりしている。

一口に観光バスといっても少人数用のマイクロバスから、サロンバス、大型のハイデッカーと呼ばれる二階建てバスなどいくつもの種類がある。ツアーの人数に合わせて、大型一台だけにするか、中型とマイクロバスの計二台で走らせるかなどを決めるのだ。

もちろん運転手も普段はこの基地に出勤してくる。そして美里たちツアーコンダクターやバスガイドも同様だ。

ここで担当運転手と簡単な打ち合わせをしてから、バスに乗り込み、乗客たちが待つ場所へと向かう。だが、早朝の今、事務所にはトラブルがあった時のための待機要員と早朝出発のツアーに出

かけるクルーしかいない。

本当に早く来すぎちゃったんだ。

パーティションで仕切られた打ち合わせスペースで、美里はスーツを弄りながらうろろしていった。

ああっ。もう。

パーティションに設置されている鏡に向かって笑顔を作ってみる。ついでに小声で、挨拶の予行演習も始めた。

本当はもっと大きな声でやりたかったけれど、隣のスペースで早出のクルーが打ち合わせをしているからできない。

「皆様おはようございます。本日はヴィレッジ観光、東京老舗商店街ツアーへようこそ。ええつと……」

あっ……

面接試験の日と同じだ。どうしてもその後の言葉が出てこない。

思わず掌を開き、そこに『人』と書いて吞み込む。

その時だった。

「くっ、お前まだそんなことやってんのか」

背後から唐突にかけられた声にびっくりして、美里は振り返ることもできず、固まった。

「あがらないおまじないなら、この間俺が教えただろう？」

続いて発せられた聞き覚えのある声と台詞に、怒りが沸点に達する。

「あ、あなたっ！」

振り向きざまに怒鳴りつけようとした瞬間、抱きしめられ、唇を奪われた。

「んっ」

覚えのある煙草の味が舌が痺れる。続いて彼の舌の動きに甘い情動が呼び覚まされ、腰が甘く揺らめいた。

あの時の男に違いない。

雰囲気違って見えるけれど、このキスの仕方と煙草の味は覚えている。

眼鏡のフレームで微妙に隠れてはいたが、ほくろが目尻にあったのも確認している。

なんで……

本社にいた人が？ どうして!?

半ばパニックになっているせいでまともに抵抗できず、彼の舌に口内を好き放題に蹂躪されてしまう。

口中に唾液が溢れてくる。それが恥ずかしくて口を閉じたいのに、男は赦してくれなかった。それどころかわざと音を立てて囁くようにしてくる。唇を押し付けたまま何度も角度を変えて、深い位置まで舌を潜り込ませて。

なんで……。駄目……

いつしか男のキスにすっかり感じてしまい、身体に力が入らなくなってくる。それどころか、も

つともつとと、身体が彼を求めていた。

だらりと垂らしていた両腕を、男の背に回しそうになった時、隣のパーティーションで打ち合わせをしていた一団が動く気配があった。

「それじゃ、そろそろ出発しますか」

「今日はよろしくお願ひいたします」

彼らの声にハツとして、男の身体を突き飛ばす。

まさか美里が抵抗するとは思っていなかったのだろう、男は軽くよろめき、パーティーションに背中をぶつけた。

「あれ？ 隣いるんですか？」

若い女の声が出て、キヤスターつきのパーティーションが動かされる。美里は慌てて、すました顔を作った。

顔を出した少女には見覚えがあった。面接の時、話しかけてきた女子高校生だ。あの時はセーラー服だったけれど、今はヴィレッジ観光のバスガイドの制服に身を包んでいる。

「あー。あの時のお姉さん。よかった。お姉さんも受かったんですね。見て見て、私の制服かわいいでしょう」

少女はくると一回転して、制服のスカートを翻した。

淡いグリーンに白い大きな襟のワンピースだ。この制服に慣れてヴィレッジ観光のバスガイドを目指す少女も多いらしい。

「あ、うん。かわいいね。それ」

少女に気付かれないようにそっと唇を拭い、美里は微笑んだ。その微笑が自然に見えたかはわからないけれど、少女もにこりと微笑み、お姉さんは何のツアーに行くんですかと聞いてくる。

「えっ、私？ 東京老舗商店街ツアー」

聞かれるままに答えると、少女は目を丸くした。

「あ、ひよっとして、十条銀座商店街とか行かれます？ 全蓋式アーケードの商店街。確か最初は大理石舗装だったけど、雨で滑ったり、破損が酷かったんで今は御影石にしたんですよ。あそこの商店街の洋服屋ってかわいくて安いのがいっぱいあって、テレビで何度も紹介されているし」

「あ、うん」

美里はつい口ごもってしまった。

ツアーコンダクターの仕事は、主にスケジュールの管理や観光地への案内、旅程の説明を行うことで、バスガイドのような観光案内そのものは含まれていない。

しかし、客に何かを聞かれた時に答えられないのもまずいので、事前に旅先の情報は入手するのだが……

目の前の少女はさすがにガイドというべきなのか、すらすらと美里の知らない情報を口に出し、もちろん知っていますよね、という顔でにこにここと笑っている。

素直に知らないと言えず、ただ、ひきつった顔で頷いていると、背後で男が微かに笑う気配がした。なっ……

美里の頭に血がのぼる。どうしてこの男は……

振り返って怒鳴ってやりたいが、少女の目が気になって、それもできない。

「子安さん、行きますよ」

研修で何度か一緒になった先輩のツアーコンがパーティションの隙間から顔を出し、バスガイドの少女——子安を呼んだ。美里にも目を留めて、がんばって、と唇の形だけで告げていく。

一団が去ると、事務所には自分たちと、奥の席にいる待機要員一人しかいなくなった。他の社員が出勤するまでにはまだ時間があるのだ。

それをいいことに美里は怒鳴り声にならないように抑えた声で男をなじった。

「ちよっと、あなた、なんでいきなり……。それに笑うなんて失礼じゃないっ」

またキスしたわね、と言いたかったけれど、恥ずかしさが先に立ってそれは言えなかった。

「だいたいセクハラよ。あなた、だから降格されて、バスの運転手なんですよ！」

「あれ？ あの時の俺だつてわかった？ 随分感じが違うと思うけど？」

男は会社のバス運転手の制服制帽姿だった。それも帽子を目深にかぶった上、鼈甲のような色合いの、太いフレームの眼鏡をかけている。彼の言うとおり随分と雰囲気違って見えるけれど、わからないはずがない。

「当たり前じゃないっ！ あなた以外にいきなりキスするような人がどこにいるって言うのよ！」

「そう？」

男は笑ってまた美里に口づけようとしてきた。ぎよっとして飛びのき、きつと睨みつける。

「最低、最低、変態。さいてー。やっぱセクハラして、降格させられたんでしょ」

離れているとはいえ、奥に人がいる。それがわかっただけでもなじるのを止められない。

「セクハラねえ……。うーん。そんなのどうでもいいじゃん。まあ確かに最低かも。けど、今回は知らない女にキスしたわけじゃないから、変態つてのはいないだろ？」

それが最低だというのがわからないのだろうか。いや、今自分で最低なのは認めただっけ。

美里の思考はぐちゃぐちゃになる。

「た、確かにもうまるつきり知らないってわけじゃないけれど……」

しどろもどろになつていると、にやりと笑われて顔を覗き込まれる。

目尻のほくろが、こんな時なのにとても魅力的に見えて、美里の心拍数が上がった。

怒りとは違うもので身体が火照り、頭が茹りそうになる。

「と、とにかく。人をからかうのもいい加減にしてよ」

身体が火照っているのを悟られないように、わざとつんと澄まして背中を向けるけれど、すぐに前に回り込まれてしまう。

「からかっているわけじゃない。最初から……」

さらにじつと男に見つめられ、心臓が跳ね上がった。頬が赤くなっているのがわかる。

なんでこんな男に、と美里は悔しくてならない。

確かに外見はかっこいいけれど……

ううん。外見だけでときめくなんて、私、どうかしている。こいつはものすごく嫌な奴。

「最初から、なんだっていうの、とにかくあなたはっ」

「おっと。そんなに大声を出す……」

男は近付いてきて、意味ありげに自分の唇を軽く舐め、美里の目の前に人差し指を突き立てた。

「っ……」

男の意図がわかり、美里は唇を固く引き結ぶ。それから気を取り直そうと深呼吸を一つして、仕事用のバインダーを机の上にパンツと音を立てて置いた。

「東京老舗商店街ツアーの運転手の方ですか？ 私は今回のツアーを担当する松橋美里です。本日はよろしくお願いたします」

自分ではなかなかうまく切り替えができたと思う。流れるように挨拶をして、営業スマイルを浮かべてみた。

「あ、よろしく。俺、浦岡直樹。歳は二十八。趣味はロッククライミング、スキー、スノーボード、それに夏はマリンスポーツ全般。それから大型免許を持つてる。運転は大好きだ。どんな乗り物でも……。だから車に限らず色々な免許を……」

美里はバインダーを拾い上げると、だからだと自己紹介を続ける直樹の目の前に突き出す。

「ここ、合コンの場ですか？ そんな自己紹介いりません」

「そうか？ 自己紹介は必要だと思うけど？ なにせこれから一緒に仕事をするんだから。少しは仲良くしようぜ」

なんなんだろう、この男は。ちよつとウザいかも。

美里は苛立つ。しかし、その苛立ちのおかげでさつきまで抱えていた不安や緊張が薄れているも感じていた。

これじゃ、面接の時と同じね、と自嘲めいた感慨に浸りそうになる。それをぐつと堪えて、バインダーに挟まれていたタイムスケジュールを直樹に突きつけた。

「本日はまず東京駅集合のグループをピックアップ。その後新橋、新宿へと向かいます。途中の渋滞を考慮して、走行時間は多めに見えています。午前中に最初の目的地である江戸川橋の地蔵通り商店街に向かいますが……」

聞いているのかいないのか直樹は顔もせず、ぼんやりとスケジュール表に目を落としている。それが美里の苛立ちをますます募らせるのだが、途中からもう安全運転してくれさえすればいいかと諦めて一方的に打ち合わせを進行させた。

その思いが顔に出ていたのか、直樹がじっと見つめてくる。

「何？」

「俺が不安？ 大丈夫。運転だけは得意だから」

微笑む直樹が憎らしくて、美里はまた怒鳴りたくなった。

不安要素ならいっぱいある。

きつとセクハラで運転手に降格されたのだろうし、万が一客にセクハラ行為をしたらどうしよういや、そうでなくても美里にまた何かしてくるかもしれない。

「いえ、浦岡さんの言葉を信じます。運転に自信があるというね」

つつけんどんに答えると、直樹の微笑が濃くなった。

「やっぱお前、おもしろいな」

だから何？ と心の中で突っ込むだけにして、美里はさつとバインダーを閉じた。

「時間です。行きましょう」

それだけ言って、直樹に背を向け、先に事務所を出ていった。

「行ってらっしゃいませ。集合は午後三時四十五分です。よいお買い物ができるといいですね」

美里はバスから降り、ツアー客に商店街のマップを渡しながら一人一人挨拶をして送り出す。

「ねえ、ひまわりって店に行きたいんだけど」

一人の女性客に尋ねられ、美里は商店街のマップにさつと目を落とした。

「あー。この店ですね。テレビで何度も紹介された」

面接で会った少女——バスガイドの子安が話していた商店街に来ていた。子安のおかげで、はたと気付き、走行中のバスの中で人気の飲食店と洋品店をマーカーで色分けしたのだ。

子安に言われなければ、何の印もついていないマップを渡すところだった。

「この店は……」

黄色に塗った店の場所を指差し、美里は丁寧に道順を教える。

「あらやだ。そういえばさつきバスの中でガイドさん、黄色が洋品店だって言ってたわね。もう年を取るとすぐ忘れちゃって。ありがとね」

六十代後半に見えるその女性は大きなショッピングバッグを抱え、嬉々として出かけていった。私、ガイドじゃないんだけど……

つい苦笑が洩れてしまうが、ありがとうと言われたのが嬉しくて、本物の微笑みに変わるまでそれほど時間はかからなかった。

今の女性が最後の一人だった。彼女を見送り、うーんと伸びをする。

今日のスケジュールはあと少し。浅草に回り、早めの夕食を食べてもらうだけだ。

なんとか無事に終わりそうだと、ちよつとだけ肩の荷を降ろし、まだ梅雨つゆの時期にはやや早い空を見上げた。

それにしても、と美里は運転席でふんぞり返っている直樹をバスの下からキッと睨にらみつける。

「ちよつと、あなたねー、少しくらいはお客様に挨拶したらどうなの」

ここに来るまでもにもバスはあちらこちらに立ち寄り、停車した。バスツアー馴なれしているひとや、丁寧なひとは、運転手にもありがとうとか、お疲れさまと言ってバスを降り降りする。しかし直樹はそれに対して軽く頷うなづくだけなのだ。

「なんで？」

啜くもえ煙草で降りてきた直樹は、美里をじろりと見る。

「俺の仕事は運転。しかも超安全運転の上、スケジュールぴつたり動かししているんだ。文句を言われる筋合いはないけどな」

いかにもだるい、という表情で制帽を運転席の上に投げつけ、煙草に火をつける。

「ちよつ、やめてよ。煙草吸わないで」

「あん？」

直樹は眉間に皺しわを寄せ、美里を不機嫌そうに睨にらんだ。

「ここは禁煙じゃないだろ？ ちゃんと……」

と、彼はポケットから携帯灰皿を取り出す。

「持っているし」

「そういう問題じゃないの、ここ、どこだかわかっている？」

観光会社の社員としての自覚が全くないんだからと思いつながら、美里は両手を腰に当て、ふんぞり返る。

「んっ？ 駐車場。というよりは商店街近くのコインパーキング。ここにうちの中型観光バスを停めるって、ちゃんと駐車場の持ち主とは話がついているんだらう？」

そのとおりだ。交渉したのは基地の渉外担当者だった。商店街に一番近いこの場所を押さえるのにととても苦労したらしい。だからこそよけいに、この男は何もわかっていないと、美里は眉間に皺を寄せてしまう。

自分たちの会社は、商店街に行くのに一番いい場所に観光バスを停めている。それは他所に停めている他社の妬たみの対象になる。そして普段この駐車場を利用しているひとにもバスが停まっているので利用できなくなっている。

美里はこれからのことも考え、他社の人間や利用者とならトラブルを起こしたくないと思つて

いた。

あそこの運転手は態度が悪いという評判が立つたら、何もかもおしまいになってしまう。それなのにこの男は……

と、溜息を吐きながら、美里は直樹から煙草と携帯灰皿を奪った。

「おい。何するんだ」

ムツとした様子の直樹に目もくれず、美里は左手を商店街に向けてまっすぐに伸ばす。

「私たちの休憩は十分。トイレなら商店街のちょうど真ん中にある商店街事務所のを借りられることになっているし、煙草は……」

言いかけてから、そこまでは聞いていなかったことに気付いた美里は口を閉ざした。

「とにかく、こんなところで煙草を吸っているのを見られたら、ツアーのお客様にも悪い印象を与えるし、商店街を普段利用している人からだって何を言われるかわからないの。だから……」

「はいはい。わかりました」

直樹は肩を竦めて、あまついでいた商店街のマップを美里の手から取り上げた。

「へー。ご丁寧……。これさつきバスの中でチェックしてたんだよな。携帯で調べながら」

「そうよ？ それが何か？」

「これからは喫煙場所のチェックも入れるんだな。最近どこに行っても禁煙禁煙つうるさいんだよ」

喫煙者の直樹だからこそその意見だ。そういえば今日も昼食をとった場所が全面禁煙で、どこで食

後の一服をしいのか困っていた客が数人いた。それぞれレストランの従業員に聞いて外の喫煙場所まで行っていたようだけれど……

「わかったわ。これからはそうする。でも今、ここで吸うのはやめてね。そうね……」

直樹が手にしている商店街マップを一緒に覗き込み、美里は自分でチェックした飲食店を指で示す。

「ここは昔ながらの喫茶店だから喫煙はできるところの。それから、ここは全国チェーンのコーヒーショップだから、きつと喫煙席もあるわね。私たちに残された休憩時間はあと少しだけれど、ここに行って吸ってきたら？ この駐車場からも近いし。ただし、制服は脱いでいってね。それと、喫煙場所のチェックについてアドバイスありがとう」

コーヒーショップの印を示す美里に、直樹は目を瞬かせた。

「何？」

不審に思っって尋ねると、直樹は苦笑した。

「あーいや。どうしてそこまで熱心になれるのかなーってさ。こんなくだらないバス旅行……、いや、旅行とも言えないな、日帰りだし。今日のなんてただの買い出しの付き合いだろ」

「くだらないって……」

あまりの言いように美里は二の句が継げなかった。

「せめて海外。それも二週間ぐらいあるのなら必死になるのもわかるけど。けど、それだって、いちいち人のご機嫌を取る仕事だろ？ やってらんないと思わない？ 俺は嫌だ」

喫煙はあきらめたのか、直樹はコインパーキングの隅にある自動販売機でコーヒーを買い、一気に飲む。

「やってらんないって、あなたそれでも社員？」

面接の時も必死だと言われたことを思い出し、かっかしてくる。怒りの感情に引きずられ、直樹を思いつきり睨みつけた。

「私は楽しいわ。ツアコンは憧れの職業だったし。さっきみたいにお客様が笑顔になってくれると嬉しい。あなたは違うの？ だったらなんで観光会社に就職なんてしたのよ」

勢い込んで言うと、直樹の口からふつと溜息が洩れた。

「まあ、俺には俺の事情があるのさ」

「何、そのかっこつけ。やっぱりあなたって最低！」

鋭く言い放ち、美里はバスへと乗り込んだ。

座席に座り深呼吸する。客が戻ってくるまでに気持ちを落ち着かせなければいけない。それに、まだやるべきことはたくさんあった。

少し気持ちが落ち着いてくると、美里は夕食を予約した浅草の天井屋に、喫煙席や喫煙所があるかを確認しようと電話をかける。

「最低って言われてもねー。わかんねーな。どうしてツアコンなんかがいいのか……。観光業界がいいのか……。でも……」

運転席に戻ってきた直樹が、ちらりと美里を見た。

「さっきのお前の笑顔はよかったけどな」

何のことだろうと一瞬考え込みそうになった美里だが、ちょうど電話の相手が応答したため、その疑問もどこかへ消えてしまった。

「あー。もうなんで」

美里は女子寮の自分の部屋で、枕を思いつきり壁に叩き付けた。

初日も翌日も、そのまた次の日も美里が担当するツアーの運転手は直樹だったのだ。単独でツアーコンダクターを始めてから、そろそろ一ヶ月が経とうとしているが、そのほとんどが直樹の運転だった。直樹以外の人物だったのはたったの四回だ。

明日もきつと直樹が運転手だろう。何故か美里はそう確信していた。

同じバスツアーでも一泊以上のものは前日にミーティングをするが、日帰りツアーは当日の朝の打ち合わせだけだ。そしてその時まで運転手が誰なのかわからない。

新人の美里は日帰りツアーしかまださせてもらっていないが、ベテランのツアコンやガイドともなると、前日のミーティングで嫌いな運転手だとわかった瞬間に、上にかかけあって、代えてもらうこともあるらしい。

代わりの運転手のスケジュールさえ空いていれば希望が通るという話だったが、まだ新人の美里

にそんな真似ができるわけもなく、毎日もやもやとした気分でも過ごしていた。

非常階段で初めて見た時は、どこか上品で洗練されている印象を受けたが、運転手をしている時はものすごく粗野だ。

いや、粗野な雰囲気も元々持っていたっけ。

などと、仕事中はもちろん、こうして帰ってきてからも直樹のことを考えてしまう。

そんな自分が嫌だ。

なんであんな男にこうも心が乱されるのかわからない。

確かに、ちよつとかつこいいけど……

直樹の顔や全身を思い浮かべる。

口のきき方も乱暴だし、愛想もないけれど、きつともてるんだらう。彼女はいるんだらうか。いたとしてもあの口の悪さだからすぐにふられるに違いない。

ついよけいなことまであれこれ考え始めてしまう。

「なんか腹立つ！」

壁に投げつけた枕を再び手に取り、今度はボスボスと拳を叩き込む。

二度もキスされたせい？ それが嫌じゃなかったから？

嫌じゃなかったのは何故？ まさか一目惚れ？

そんなわけない、と美里はまた枕を殴りつける。

絶対にあんな男認めない。好きじゃないし、今後も絶対に好きにならない。

仕事を馬鹿にしきっているのがまず気に食わない。運転の腕は確かにいいけれど、お客様に対しての心遣いが何一つ感じられない。

そんな男、絶対に認めるものか。

美里は深く息を吐き出すと、枕を膝の上に置き、ベッドの背もたれにもたれかかって明日のツアーの下調べを始めた。

ひとしきり枕を投げたり叩いたりしたおかげか、少し気分がすっきりして、仕事モードに入れたのだ。

明日も今日と同じ内容のツアーだ。だから下調べというよりは、今日聞かれてわからなかった点の確認などや反省の意味合いが強い。

ここ……

このサービスイリアはトイレの個室数が少ないのよね……。しかも明日は日曜だし、少し長めに休憩時間を取って……と、タイムスケジュールの調整を始めたのだが、唐突に今日あったちよつとしたトラブルを思い出し、落ち込む。

「ああ、やなこと思い出しちゃったじゃない……」

サービスイリアに向かう途中、酔った男性客が座席から立ち上がり、何を勘違いしたのか、いきなり美里に抱きつこうとしたのだ。

その時、偶然バスが大きく揺れたものだから男性客は尻餅をつき、美里は指一本触れられずに済んだのだけれども、その後のフォロワーが大変だった。

男の連れは尻餅をついたのは男が酔っ払っているせいだと笑っていたけれど、当の酔っ払いは運転の仕方が悪いとぶつぶつ言い始めて……

頭を下げて、なんとか怒りを収めてもらったのだが、あんな思いはもう二度としたくなかった。入社時の研修で酔っ払いに絡まれた時の対処方法も習ったので、きちんと対応できる自信はあった。

それなのにバスが揺れたせいで、あの酔っ払いに何度も頭を下げないといけなくなったら、他のお客様にも不快な思いをさせてしまったと、暗い気分になる。

それというのも、あいつのせい……

「そうよっ、絶対あいつのせい！」

怒鳴ってから、美里はまた枕を叩いた。その弾みで資料がベッドの上に散乱してしまう。

あいつがあそこで下手な運転さえしなければ……

何が運転には自信がある、よ。

目の前に憎らしいほどかっこいい直樹の顔がちらついて、美里は慌ててぶんぶん頭を振った。

ああ。いけない。

気を取り直し、散乱した資料を掻き集める。

でも……

どうしてあの人、あんな眼鏡なんか？

初めて本社で会った時は眼鏡なんかかけていなかった。

目が悪かったのかしら？ コンタクトにすればいいのに。あんなにいい顔なのに眼鏡で半減しちゃってるわよね。

やだ、もう。どうして私ったら……

直樹がかっこいいとか、眼鏡をはずせばいいなどと考えてしまう自分が恥ずかしくて、掻き集めた資料の中に顔を埋めるようにしてしまう。

彼を気にしているなんて思いたくない。まさか好きだなんて絶対ない。認めない。

「ああ、もう。やだやだっ！」

美里の思考は振り出しに戻り、結局また枕を投げつけていた。

二

「本日はヴィレッジ観光東京近郊日帰り温泉ツアーをご利用いただきありがとうございます」

美里はバスの前方に立ち、マイクでそう挨拶をする。

いつもこの瞬間が一番緊張する。心臓が痛いくらいに鼓動を打っている。隣で運転する直樹にまで聞こえているのではないかと思うほどだ。

それでもなんとか自然な笑顔で声を出せた。

「私、本日のご案内役をつとめさせていただきます松橋美里でございます。そして運転は浦岡直樹

「どうぞいます」

そこまで言って美里は直樹にマイクを向けた。

彼は紹介しても、軽く頷くだけで決して自分から挨拶をしない。

でも、それでは駄目だ。お客さんを安心させたり笑顔にさせたりしないと。

何回目からだろう、美里は直樹の口元にマイクをつきつけ、嫌でも必ず何かをしゃべらせるようにしてきた。

今日もどうせ、「どうも」とか「浦岡です」とそっけなく一言話すだけだろうと思っていると、ふいに直樹の口元に微笑が浮かんだ。続いて出てきた台詞に美里は目を瞠る。

「おはようございます。浦岡です。よろしくお願いいたします」

えっ？

あまりの驚きに、直樹の口元にマイクをつきつけたままになってしまふ。

すると直樹がちらりと視線を投げて寄こした。自分の番は終わったから早く続けろと促しているのだ。

「あ、今日は……」

予想外の事態に美里の頭は真っ白になってしまふ。

克服したと思っていたあがり症が一気にぶり返し、身体が震えて笑顔を作れない。

どうしよう。どうしよう……

このあとツアーのタイムスケジュールを伝えなければいけないのに、何も言葉が出てこないのだ。

それどころか自分がどこにいて、何をしているのかすらもわからなくなってきた。

「このあと少し揺れまーす」

その時、直樹に突きつけたままだったマイクを通し、そんな声が響いた。

どこか間が抜けていて、やる気のなさそうな声だ。

その声に美里ははっと我に返る。

直樹の言葉どおりバスがかなり大きく揺れた。まだ高速へ入る前だ。

朝の道はさほど混んでいないし、道路工事も、その跡も何もない。それなのにガタガタと揺れるバスに美里は眉をひそめた。

なんで？

何もないところで？

「申し訳ありません」

疑問とバスの揺れで、美里の緊張が解けた。

直樹に向けたままだったマイクをさっと戻し、乗客たちに向かってにこやかに微笑む。

「他の車が落としたゴミの上に、タイヤが乗ってしまったようです」

あらそう。いやーね。マナーがなっていないわね。

乗客の大半は中年以上の女性だ。彼女たちはそんな声を上げ、まわりの人たちと文句を言い合っている。

ひよっとして……。今、私、彼に助けられた？

美里は直樹を見たが、彼はまっすぐ前を向いて運転に集中している。

「では、改めまして、今日のご予定をお伝えいたします。このあと……」

伝達事項を何とか全て伝え、美里はほっとして自分の席に座り込もうとした。そのとたん横から手が伸びてきてマイクを奪われる。

「何？」

小声で少しなじるように問いかけたが、直樹は答えず、片手運転のままマイクに向かってしゃべり始める。

やめて！ 片手運転は。

咄嗟に奪い返そうとしたが、直樹の口から出た聞き馴れない言語に驚いて、動きを止めてしまう。

中国語のような発音だと思っていると、後ろの方の席から片言の日本語が飛んできた。

「アリガト。謝謝」

「不謝」

それに対して直樹はそう答え、美里にマイクを突き返す。

え？ えっ？

マイクを受け取り、慌てて自分の席に座った美里は乗客名簿をめくる。

今日のお客様は、町内会の団体で、そのうち三分の一がご夫婦。あとはお子様が……

どこにも中国人の名前はない。が、はっと思い出した。

昨夜、あれこれと考えて散らかした資料の中に確か、何かのリクエストが混じっていた。

あれは……

もう一度乗客名簿に目を落とした美里は、すぐに顔を上げて直樹を凝視してしまった。

昨夜の資料の中に、台湾から親戚が遊びに来ている一家があるので案内パンフレットを一つ中国語のものにしてほしいとあったのを思い出したのだ。

そう書かれた資料そのものは持ってきていないが、名簿に一人だけ、少し趣の違う名前があるのに気付いた。

林虹華だ。

下の名前、ホンファンって読むのかしら？

最近の子供に変わった名前をつける親も多いので『にじか』とでも読むのだろうと思いついて、いずれにしろ自分のミスだ。

そういえばリクエストには町内会長からの直筆メッセージも添えられていた。林さん一家は華僑で全員日本生まれの日本育ちだが、親戚の子は違うからなにとぞよろしくという内容だった。

ああ、もう私ったら……

直樹に借りを作った気分で落ち着かなくなる。

さっきのバスの揺れも……

わざとなんだろうか？

わざとしか思えない……

あのバスの揺れと気の抜けた彼の声があったから、あがりきってしまう前に自分を立て直せた。

昨日、酔っ払いに抱きつかれそうになった時のバスの揺れも……
もしかしてあれも彼がわざとやったのだろうか、直樹の横顔を窺う。

そして今も……

全て自分のためにしてくれたことなのだろうかと思いつつも、頭を振って気持ちを切り替え、仕事モードになる。これ以上ミスを犯してはいけない。

さっそく携帯メールを使って、これから行く施設に中国語のパンフレットがあるかを確認する。すぐに届いた返信で中国語のパンフレットが入手できると知って胸を撫で下ろした。

それにしても、どうして彼は虹華が日本人ではないと見抜いたのだろうかと美里は首を傾げた。外見は全く日本人と変わらなく見えるのに。

「おい」

そんな美里に直樹が声をかけてきた。もちろんかなり小さな声だ。

「あっ」

何故声をかけられたのかわかり、美里はまたマイクを持ち、立ち上がった。

「もうすぐサービスエリアでトイレ休憩となります。お時間は十五分です」

まるで美里のアナウンスが終わるのに合わせたようにバスはすーっとサービスエリアに入り、わずかな振動だけさせて停まる。

直樹が運転するツアーが続いていて、あまり他の運転手のテクニクを知らないけれど、こういう時、うまいなあと感じてしまう。

いつも自分の言葉が終わるタイミングでサービスエリアや、観光地へバスが入っていく。いや、到着しそうな時間になると、いつも直樹から、声や目で合図されているような気もする。

もしそうだとしたら、悔しい。けれども同時に感心もしてしまう。

トイレへ行くために降りていくツアー客を見送りながら、あんなにやる気なかった直樹がどうして、と運転席を横目で見た。

「で、お前、パンフレットの手配はできたのか?」

乗客全員が降りたところで直樹が言った。

「えっ?」

何故それを知っているのだと、美里は目を瞬かせる。

「さっき携帯でどこかにメールしてただろう? あれって、中国語のパンフを用意してもらっているんだと思う。前を見て運転に集中していたはずなのに。どこに目がついているんだろうか」

「用意できたわ」

色々と助けてもらった。ここはお礼を言うべきだろう。

そう思ったが、どうしても素直にはなれない。

「そ、そんなことより、どうして台湾の方がいるってわかったの? それにあなた、中国語を話せるなんて……」

感謝の言葉の代わりに出てきたのはそんな疑問だ。

「あつ？ お前耳悪いのか？ あの客、バスに乗つてすぐ、中国語で誰かと話していただろう。その誰かは別の誰かと日本語で普通に話してたけどな」

「そ、そうだった？」

耳が悪いと馬鹿にされたことよりも、気付かなかった自分に腹が立つて美里は唇を震わせてしまふ。

「お前、まだいっぱいいっぱいなんだな」

「へっ？」

微苦笑とともに言われ、変な声を上げてしまふ。

「表面上はあがつていないように見えてもな……。まあ、手に人つて書いて呑み込まなくなっただけマシだけど」

「な、何よそれ」

今さっき、一瞬でもお礼を言わなければと思った自分をなかつたことにしたい。

やっぱりこの男は最低。

「だいたいさっきは何よ。いつも挨拶なんかまともにしないのに。どういう風の吹き回しよ」

苛立ちに任せて、文句を言つてやる。

「何？ 俺が挨拶しちゃ悪いってか？ 俺だつて、気まぐれの一つや二つ起こすさ。っていうか、この俺がまともな挨拶をしてやつたんだ。少しは感謝しろ。さっきの中国語だつてそうだ。俺がいなかつたらどうする気だつたんだ。え？」

いわゆる『ドヤ顔』で言われて、ますます腹が立つ。思いつきり睨みつけたが、彼は意に介した様子もなく、大あくびをする。

「ふあー。朝早いし、眠いし……。つたく。だりいな。あー煙草吸いたい」

彼は運転席でだらしなく足を組み、コキコキと首を鳴らす。

「駄目よ」

制止すると、直樹は形のいい眉を片側だけひょいっと上げた。

「ああ？ 俺眠いんだけど？」

「だから何？」

まさか煙草が眠気覚ましにでもなるんだろうか。思わず美里も眉を吊り上げていた。

「なんか、眠いとすぐく吸いたくなる」

やっぱり眠気覚まし？

「文句があるか？ 俺に居眠り運転されたら困るだろう？」

直樹はハンドルを指でトントンと叩き始めた。それが、俺は苛ついているぞというアピールに見えて、美里まで苛々してしまふ。

「で、でも駄目。仕事中は絶対に」

苛々していたから、声が少し上ずってしまった。それがおかしかったみたいで、直樹に笑われる。「ふーん。そう。わかった」

口ではわかつたと言いながらも、ちつとも納得していないような言い方だ。しかもまた笑われる。

さつきとは全然違う笑い方だけれど、どこか人を食ったようで頭に来る。そんな状況なのに、それでも彼の笑顔は魅力的で、しゃくだけれども美里は見とれてしまった。

今は眼鏡を外しているから、笑うと目尻のほくろが少し動くのが見える。それも素敵で、妙にドキドキしてくる。

苛々していたのに胸をときめかせてしまう自分がなんだか赦せなくて、ついふいっと横を向いた。

「なんだよ。ガキか、お前その態度」

「ガキ？ 何よそれ？ 私の何が……」

子供じみた仕草を馬鹿にされているんだとわかっていたけれど、素直に認められない。美里はつかつかとバスのステップを上がると、直樹を間近から見下ろした。

彼が座っていないければこういうふうに見下ろせなかつただろう。

いつも彼から見下ろされているから、なんだかちよつとだけ嬉しい。

こんなことで仕返しした気分になっているからガキだと言われてしまうのだろうけど、嬉しいものは嬉しいのだ。

「とにかく、駄目なものは駄目」

腰に手を当ててきつぱり言うと、彼はさつきよりもさらに魅力的な微笑を見せた。かと思うと、いきなり美里の手を掴んで引き寄せる。

「何っ！」

ギアに当たったらずいとはと咄嗟に身体を捻る。そのせいで直樹の膝の上に向かい合うように乗り

上げる形になり、美里は焦りまくった。
「煙草が駄目なら……」

粗野なのにどこか上品で、理知的な瞳が目の前にある。それだけで心拍数が上がり、心臓が喉から飛び出しそうになる。

「代わりにお前の唇を吸わせてくれ」

「何を言っ……」

抗議の言葉は途中で直樹の口に呑み込まれた。

「ふっ、う……んっ」

必死になって唇を引き結び、直樹の舌の侵入を阻もうとする。けれど、煙草の味も匂いもしないそれに隙間をそろりと舐められ、美里は唇を綻はせてしまう。

その隙をついて素早く入ってきた舌が美里の口腔の弱い部分をくすぐるように舐め、歯を一つ一つなぞってくる。

「んっ、くんっ……」

鼻から自然と甘い息が洩れた。

キスをしているだけなのに、下半身が疼いてたまらない。彼の胸に押しつけるようになって乳房の中心も疼く。つんと尖って硬くなってきているのがわかり、どうしようもない恥ずかしきと気持ちよさに美里は泣きたくなった。

その時さつと彼の身体が離れ、キスも解ける。

誰かの足音が近付いてきたのだ。
美里も慌てて直樹の上から降りる。

足音の主は隣に停まった観光バスの客らしく、美里たちのバスの前を素通りしていった。
その人影を見送ってから、直樹が微笑む。

「どうした？」

直樹は手を伸ばし、乱れた美里の髪を直しながら優しく囁く。

「なんだか涙目になっている」

そう聞く直樹の瞳はどこか切なげに見えて、美里は胸をつかれた。

そんな瞳をされたら、直樹に好意を抱かれていると勘違いしそうになる。

今日も随分と助けられた。それもさりげなくだ。

それはもしかして……

もしそうなら……

彼の気持ちが自分に向いている。心より先に身体がそれを受け止めているから、美里は拒めないのかもしれない。

粗野で態度が悪くて、でもさりげない優しさや気遣いも持っている直樹に好かれている？

キスをしていた時以上に美里の心臓は跳ね上がる。

「な、涙目って……。当たり前じゃないの！ いきなり、こんなところでキスするなんて、最低！

馬鹿！」

けれど口から出るのは直樹をなじる言葉だ。同時に彼の頬を叩こうと手まで動いてしまう。

「つと……」

直樹はやすやすと美里の手首を掴み、笑った。

「何？ お前そういうのが趣味？」

「そういうの？」

何を言われているのかわからなくてきよんとすると、直樹は美里の手首を掴んだまま彼女の身体をまじまじと見てくる。

「あー。でも似合わないか、ボンテージ。ちよつと胸が足りない」

「なっ！」

その言葉で直樹に傾きかけていた気持ちが吹っ飛んだ。

胸が小さいのはちよつとしたコンプレックスだ。そのコンプレックスを刺激された上に、SMの趣味があるように言われ、もう怒りを通り越して絶句してしまう。

でも何か言い返したくて、口をばくばくさせていると、さらに突っ込まれた。

「なんだよ、今度は金魚？ やっぱりお前おもしろいな」

もちろんその台詞には笑いが滲んでいる。美里はまた直樹を叩こうと手を振り上げようとしたが、その手は彼に掴まれたままだった。

「そう、殴られちゃたまらない」

そのまま引き寄せられて、激しく口を食られる。

「んんん」

今度はきつちりと唇を引き結び、絶対に彼の舌を入れまいと首を振った。

「わかったよ。そんなに嫌か」

不意に彼の拘束が解かれる。

「キスするどころか俺と話すのも嫌そうだな、お前」

「当たり前じゃないっ。何考えてるのよ」

「何って……」

ふと彼の瞳に翳りが見えた。さっきと同じ、切なそうな瞳だ。

なんだかまた胸をつかれた。

けれど、騙されないとすぐに固く決心する。

これはきつと彼の手口なのだ。

からかったり、わざと切なげにしたりして、今まで何人もの女性の気を引いてきているに違いない。

キスも妙に慣れている。さんさん女を弄んできた悪い男なのだろう。絶対にそうだ。危うく引つかかるところだったと、美里はきつく直樹を睨む。

さつと背中を向けると、美里は平静を装ってバスを降り、外で帰ってくる乗客を待った。

後は解散場所への到着を待つのみ、という時に騒ぎが起こった。

「運転手さん、バスを停めて！」

一人の女性がいきなりそう叫んで座席から立ち上がったのだ。

「お客様、いかがなされましたか？ ご気分でも……」

美里は慌てて立ち上がり、その女性のもとに向かう。

年の頃は五十くらいだろうか。見た目で女性の年齢を判断するのは難しいが、栗色に染めた髪の毛に白髪が見え隠れしている。

確か……と、座席表を脳裏に思い浮かべる。

「ええっと、真島様？」

そう。真島様だ。真島瑠子様。年齢は五十代半ば。

姓名と年齢を思い出しながら、真島のほうへ歩いていく。直樹もバスを停めてくれた。まだ高速へ入る前でもよかったと思う。通路に屈み込むようにして、美里は真島瑠子を見る。

通路側には夫の秀夫が座っている。座席に座り直し、窓の外を見ている瑠子の表情はよく見えなかったけれど、泣いているように見えた。

「お加減でも悪くなりましたか？」

瑠子はぴくりともせず、美里の問いかけに答えようとしめない。

「真島様、奥様は……」

困って秀夫に話しかけると、彼は怒りもあらわに口を開いた。